

【研究ノート】

F. Schleiermacher 『宗教論』 研究史について

川 島 堅 二

序

Schleiermacher の『宗教論』初版^① が世に出てまもなく2世紀が過ぎようとしている。出版当初からその解釈をめぐる論争の絶えなかった本書の研究史を概観し、そこにいくつかの潮流を認め、それを分類することが本稿の課題である。『宗教論』の思想的影響は、非常に多岐に渡っており、そのすべて扱うことは無論不可能である。ここでは筆者の研究関心にしたがって、神学的・宗教学的に意義のあるものを主に取り上げ、それ以外のたとえば教育学などへの影響は、最小限にとどめたことをあらかじめお断りしておく。

さて研究史は、次の4つの主題群に分類することが可能である^②。第1に、「直観」と「感情」としての宗教の定義的本質規定を内容とする研究で、純粋に量的にも群を抜いた主題としてあげられる。第2に、これと密接に結びついた主題群といえるのが、『宗教論』の神概念や宇宙概念の研究に関し、キリスト教に対する Schleiermacher の立場を突き止めようとするものである。第3の主題群は、『宗教論』への接近をまったく異なる目的に向けるもの、すなわち、『宗教論』が属するあるいは構成する学問的言語的場の形式分析である。

恵泉女学園大学 人文学部紀要 第10号 pp. 165～pp. 194, 1998

「F. Schleiermacher 『宗教論』 研究史について」

川 島 堅 二

第4に、少数の特別な個別的主題が認められる。それぞれの主題群において、どのような解釈の重点を研究史が認めているか以下に概観してみたい。

なお、末尾にC. Albrechtによる『宗教論』初版の内容構成表⁽³⁾を訳出する。同様の区分は、すでにR. Otto⁽⁴⁾やF. Hertel⁽⁵⁾のものがあるが、そのいずれにもましてAlbrechtのものは詳細を極め、またその構成区分も独自性があり、今後の『宗教論』研究に対し豊かな示唆を与えるものだからである。

1. 宗教の本質規定としての「直観」と「感情」をめぐる研究

『宗教論』の宗教理論を概念的に再構成する解釈は、通常、「直観」や「感情」というSchleiermacherによって概念的に固定化された表現を、批判的に十分吟味できるように再構成することによって行われる。さまざまな表現を構成する方法は次の二通りの流れがある。一つは、『宗教論』の錯綜した議論の筆致の内的体系を発見し明らかにしようとすることであり⁽⁶⁾、もう一つは、様々な言説を外的な秩序付けの視点の下で構成する試みである（その視点とは、前提とされる直観内容による秩序であったり⁽⁷⁾、直観の根底にある心理学的事象による秩序であったりする⁽⁸⁾）。主要な成果としてであろうと、副産物としてであろうと、そのような仕方で行われた研究は、『宗教論』初版の一貫性の無い用語法が、定義的な要求を不満足な仕方では満たすことができないゆえに、絶えず不安に曝される。このような結果と、『宗教論』の改訂版における数多くの（少なくとも用語的には）改変において提供される資料とは、次のことへと導く。すなわち、このような解釈の方法は、『宗教論』の初版においては意義あるものにはなり難く、これをこえて『宗教論』第2版、第3版の概念研究⁽⁹⁾へ（さらにはSchleiermacherの全著作へ⁽¹⁰⁾）手を出すということである。

まず、純粹に概念解釈的なテキスト研究に関して言えば、より古い、部分的にはかなり粗雑な理論に対して、適切かつ詳細な観察が現れてきた。概念の相違を過小評価する研究も⁽¹¹⁾、反対に、『宗教論』第2版における直観概念の突然の完全な放棄という指摘も⁽¹²⁾支持し難い。むしろW. Schultzは、すでに初版において、第2講演から第5講演においては直観概念が制限されてい

ることに注意を喚起した⁽¹³⁾。またF. W. Grafは、次の点を強く指摘した。すなわち、Schleiermacherは、『宗教論』の第2版、第3版においても直観概念の使用を放棄してはいない。ただ彼は、それを時に明確な動機を持って感情概念によって代用することにより、制限したのであると⁽¹⁴⁾。統計的なテキスト調査は、感情概念の機能的強化に都合のいいように、直観概念が部分的に漸次後退していったことを示している。

勿論、この概念変化の実際の内容についての解釈は、依然として論争の対象である。基本的に、この評価は、解釈者それぞれの具体的な研究動機のあり方や、Schleiermacherの思惟における外からの影響の問題をどう扱うかにも依存している。個々には次のような解釈のタイプが互いに区別可能である⁽¹⁵⁾。

[a.] 概念的変化の内実は軽視される。Schleiermacherの思惟の連続性の証明という目的のために、『宗教論』の各版における意義の変化についての有名なSchleiermacherの自己言及⁽¹⁶⁾が、使用され(変化した)概念自体の内容に直接関係させられる。この証明目的と、Schleiermacherの宗教理論の仕上げにおける外部影響からの完全な自由という主張の意図が一致する⁽¹⁷⁾。

[b.] 概念的変化の内実は、初版の残念な変形と評価される。通常この解釈が見られるのは、『宗教論』の最初の出版意図の再構成に解釈の主たる関心が無く、『宗教論』の諸規則が、外部から得られた理解の範疇(たとえば、普遍的な敬虔の現象学や⁽¹⁸⁾、一般的心理学的原則の受容⁽¹⁹⁾、また信仰論から借用された信仰概念など⁽²⁰⁾)との折合いのよさで調べられ、解釈の範疇が、初版の言説と調和し、改訂版のそれとは調和しないような場合である。

[c.] 概念的変化の内実は、初版本来の意図の明確化のため内容的に必然的な改善として解釈される。この解釈は、Schleiermacher研究において最も広く、またもっとも多くの示唆を伴っている概念的改変についての評価である。最初にR. Haymが、次の点に注意を喚起した。すなわち、『宗教論』の改訂版において宗教意識における感情の要素が強

化強調されるが、これはシュライエルマッハー本来の意図と全く合致するものである。その意図とは、宗教を思惟や行為から範疇において区別するとき、宗教の客観的対象との関連性をあらかず表象も排除しようとすることである⁽²¹⁾。R. A. Lipsiusによれば、感情的局面の強化は、『宗教論』の第2版において認められる神概念の変化からの必然的な帰結である⁽²²⁾。それに対してJ. Gottschickは、宗教的なものの機能記述から感情概念が後退するのは、Schleiermacherの学問概念の細分化に原因があると見る。そこでは直観が真の学問的認識の根本機能と見なされているからである⁽²³⁾。また多くの解釈者が、直観概念の使用が最小限になる理由を、誤解を避けるためのSchleiermacherの努力に見ている。この用語が、超越論的観念論において用いられるようになるからである⁽²⁴⁾。E. Hirschは、感情概念に有利になるように直観概念を排除したおかげで「認識理論的不可能性」から解放され高められた第2版の思索レベルを強調する⁽²⁵⁾。最後にF. W. Grafは、『宗教論』における直観概念の二重の用法という見解に至る。Schleiermacherは、強調点が精神作用の認識、感情、行為、すなわち、学問、宗教、実践の統一性という面にあるときは、宗教を直観と感情の統一と規定する。それに対して、思惟や行為と同等にある宗教の独立性を強調したいときには、宗教を排他的に感情と規定するというのである⁽²⁶⁾。

2. 宗教の対象規定としての「神」「宇宙」をめぐる研究

第2の主題群においては、Schleiermacherの宗教理論の研究は、間接的ではあるが、強く資料に即した形で行われる。すなわち宗教の独自性の主張は、宗教の本質規定の直接的反復によって吟味されるということではなく、むしろ次のような見方に取り組みの端緒を持つ。すなわち古典的ではあるが、決まり文句によって排他的に固定された概念を避けるための、宗教の客観的な財産目録において確認できる努力は、広範囲における神概念の後退と、同時に宇宙概念の優先性において最も目立って現れるという見方である。汎神論あ

るいはスピノザ主義という非難の吟味は、この主題群に確固とした足場を持つと共に、この解釈を導きあるいは伴うところのキリスト教に対する Schleiermacher の立場の格上げへの関心をも有している。研究史において初期の頃から次のような見解が認められていた。すなわち宇宙についての Schleiermacher の講演の少なくとも最初のポイントは、人格化された神概念の軽率な使用という思慮のない人間化された傾向を明確化し、それを避けるということにあった。分析的な鋭い感覚を持って行われた議論も思い出されるべきである。それは『宗教論』の各版における宇宙概念の一致のない多義的な用法という命題に対して、宇宙概念で意図されているものが内容的に同一であるという主張による反論である。R.A. Lipsius が、1799年に定められた神と世界の同一性は、1806年以降意図された両者の対立によって撤回されたと見るとき⁽²⁸⁾、O. Ritschl⁽²⁹⁾ や H. Sueskind⁽³⁰⁾ は、A. Ritschl⁽³¹⁾ を引きながら、宇宙概念の一貫した統一的焦点として、有限者と無限者の相互関係を強調する。他方、E. Huber は、宇宙概念の統一性と全体性という二重の面を強調する特性を指摘する⁽³²⁾。そこにはすでに、宇宙と神と世界の三概念における範疇的差異への洞察が予示されている。この方向性は、宇宙概念における二つの意味契機と三つの意味層の互いに調和する意義を証明する（そのパラメータは、被造性の啓示が生じる程度である）という P. Seifert の努力によって受け継がれた⁽³³⁾。

しかしながら近年の研究が初めて、概念的に両立せず置換するしかない表象への志向的還元が存在する解釈的自己制限を克服することに成功した。一連の伝統的な問いの完全な解決が、F. Hertel に次のような洞察、すなわち、宇宙の本来的普遍性は、あらゆる物質化要求の拒絶を通して、その客体化不可能性という主張に到達するという洞察を可能にしたのである⁽³⁴⁾。かつて E. Hirsch が、汎神論の証拠として有名なあのスピノザへの供え物について当然とされていた非難を、その命名の特別な動機を強調することによって増し加えたが⁽³⁵⁾、今や、F. Beisser は、汎神論という非難の根底にある概念の正統主義を、才気に欠けるとしてその仮面を剥がす。『宗教論』がその最も核心において戦ったのは、そのような才気の無さだったのである⁽³⁶⁾。

以上見てきた第2の主題群に分類される諸研究に共通している点は、それらが『宗教論』の特にキリスト教的な性格について意見表明をしていることである。『宗教論』のキリスト教的性格という結果へは、二つの異なった方法がとられている。第1に、第2講演と第5講演との関係の分析で、結果として、様々な強調の差はあるものの、両者の調和性が確認される⁽³⁷⁾。すなわち『宗教論』の構造を分析する個所において、解釈上暗示的な成就図式を疑うことに対する強い拒絶や⁽³⁸⁾、第5講演に対する第2講演の関係を、証明可能なキリスト教的性格にではなく、研究が取って進むことが可能な二重の道との関係で企てようという明確な意図に⁽³⁹⁾、時として出くわすのである。しかし、このような意図も、ここでの『宗教論』の構造の解釈は、キリスト教的性格の証明を事実としては目指すものであるゆえに⁽⁴⁰⁾、思弁的な方法をとる第2講演と経験的方法をとる第5講演との相関関係——これは後にSchleiermacherによって批判的な方法で学問性のプログラムにまで高められるやり方の雛形といえるが——を検討するというところには至らない。もう一つの方法は、キリスト教的性格が、『宗教論』に直接⁽⁴¹⁾ではなく、講演者個人に⁽⁴²⁾あることを証明しようとする。他方、キリスト教的性格を、『宗教論』、あるいは講演者自身から剝奪する研究もある。

このような第2の主題群の研究史的一瞥を終わるに当たり、確認しなければならないのは、ごく最近ようやく伝統的な問題設定の解決が認められ始め、『宗教論』の神概念本来の内容が明らかになってきたということである。それによってこの複合的観念（神概念）についての偏見の無い研究が可能となったのだが、それをP. Seifertは、次のように表現している。「ここにおいてSchleiermacherは、哲学的Ideogrammeの宗教的現実性に対する適用という自分の計画を、そして宗教的現実性に対する形而上学的思弁の拒否を、一つの中心点で首尾一貫して遂行しようとしたのである。」⁽⁴³⁾

3. 『宗教論』の形式をめぐる研究

以上見てきた研究の主題群は、いずれも『宗教論』の内容的な個々の言説に研究の端緒をとるものであった。次に紹介する第3の主題群は、すでにそ

の端緒から異なっている。すなわち、それは、まず一般的に言うなら、『宗教論』において記述されている宗教、または『宗教論』自体の外的な形式に結びつくものである。ここで紹介する取組みすべてに共通しているのは、宗教の本質を類分析を通して解明しようという努力である。『宗教論』において記述されている宗教自体の形式規定か、または『宗教論』の文学的あるいは百科全書的形式の規定が与えられる。個々に見ていくと、先ず宗教の類規定と、『宗教論』の類規定とが区別されねばならない。

宗教の類規定のタイプは、他の様々な人間の精神的営みの中で、宗教の純粋な分類を通して本質的に際立った特徴をなす。通常この分類は、単純な概念的関係規定という形式によってなされる。この方法は、最も初期の、最初の方角づけを求める研究段階に特徴的であり、それゆえに支持し得るものである。なぜなら、そのような関係規定は、通常、宗教概念との内容的対決という収穫の保証された要約としての役目を果たしているからである。それはさらに『宗教論』自体における（上で引き合いに出された）関係の解明を通して、その誘因をも指摘できる。また何より、芸術⁽⁴⁴⁾ や神秘主義⁽⁴⁵⁾ と宗教の親和性が強調される。

第2の『宗教論』の形式研究のタイプは、さらに二つのグループに分けることができる。一つは、『宗教論』自体が属する百科全書的場の分析であり、もう一つは、『宗教論』において、初めて構成された学問的方法を概念的に確定しようとするものである。前者に関して言えば、その議論は、本質的に次の問いをめぐっている。（宗教的教訓⁽⁴⁶⁾、あるいは文学的に創作された説教⁽⁴⁷⁾といった『宗教論』の評価は、ここでは度外視する。）すなわち、『宗教論』が属するのは哲学なのかそれとも神学なのかという問いである。H.-J. Birknerは、この議論を次のようにまとめている⁽⁴⁸⁾。先ずあれかこれかといった問題設定に含まれている『宗教論』本来の意図の倒錯の指摘、次に、それにもかかわらず『宗教論』をSchleiermacher自身の学問体系に位置づける可能性の指摘、そこでは、『宗教論』は典型的に「哲学的神学」の学科に数えられるという。

Schleiermacherの学問体系ではなく、現代の多様な学問学科によって、こ

の解釈の取組みが導かれるべきだというなら、それは『宗教論』によって基礎付けられた学問的方法を問うことになる。それは宗教の事実性を前提とする『宗教論』の出発点に組するということであり、『宗教論』において問題となっているのは、近代的意味における最初の宗教現象学⁽⁴⁹⁾、あるいは最初の宗教心理学⁽⁵⁰⁾ だという結論に至ることになる。

4. その他の個別研究

研究史の主題群の最後は、『宗教論』において特別に、あるいは個々に扱われている主題を一覧することになる。それらは研究史的には、粗雑な注意しか与えられてこなかったものである。まずあげるべきは『宗教論』における教育理論である⁽⁵¹⁾。それはさらにより専門的な問題設定に区分することができる。たとえば、『宗教論』において扱われている個性理論、これは同時期に書かれた『独白録』との関係で論じられるだろう。あるいは社会的制度である「教会」や「国家」における個人と共同体との関係⁽⁵²⁾、また『宗教論』の歴史概念の体系的機能なども問うに値する。これら個々の問いの研究から吟味されるのは、『宗教論』が歴史における文化理論に関しどのようなプログラムを保持しているかということだろう。それはまた哲学的倫理学の体系的資料を示唆するものと読むことも可能である。さらに専門的で、『宗教論』の本質からは多少逸れるかもしれないが、直観の本質と方向性による実定宗教の二重構造への示唆や、宇宙と諸宗教の段階モデルへの示唆が、最近G. Scholtzによってなされている⁽⁵³⁾。

【補遺】 C. Albrecht による『宗教論』初版の内容構成表

数字は初版本の頁数, () 内の数字は, Kritische Gesamtausgabe.1. Ab. Bd. 2, 1984. の頁数

全体の序論：第1講演「弁明」 1-37 (189, 1-205, 2)

主題：目的とする宗教の実質的概念規定の形式的出発条件（この主題は、3つのテーマで扱われるが、それらの実質的要点は、補説の中にある。）

1. 講演者に要求される資格 1-15 (189, 3-195, 24)

- 1.0. 序：この講演の企てがもたらす成果の見込み 1-3 (189, 3-190, 8)
- 1.1. 宗教について語る講演者の職業的に規定された資格 3-5 (190, 9-191, 10)
 - 補説1: 存在者の二重性が、仲介の必然性を基礎付ける 5-14 (191, 10-195, 2)
 - (a)存在論的根本状態としてのあらゆる存在者の二重性 5-9 (191, 10-192, 39)
 - (b) 個の存在論的根本状態に根ざす仲介の必然性, 計画された企てとの関連で 9-14 (192, 40-195, 2)
- 1.2. 宗教について語る講演者の伝記的に要求される資格 14-15 (195, 2-24)
- 2. 聴衆に要求される資格 15-20 (195, 25-197, 9)
 - 補説2: この講演の目的と方法 19-20 (197, 10-30)
- 3. 対象に要求される資格 20-37 (197, 31-205, 2)
 - 3.1. この企ての出発点としての対象に対する聴衆の態度 20-29 (197, 31-201, 38)
 - 3.1.1. 聴衆が宗教を軽蔑する必然性 20-21 (197, 31-198, 5)
 - 3.1.2. 聴衆が知っている宗教への接近の形式：思弁的と経験的 21-29 (198, 5-201, 22)
 - 3.1.2.1. 一面的な思弁的方法の問題性 21-24 (198, 5-199, 15)
 - 3.1.2.1.1. 境界点から出発する思弁的接近 21-23 (198, 5-42)
 - 3.1.2.1.2. 中点から出発する思弁的接近 23-24 (198, 42-199, 15)
 - 3.1.2.2. 一面的な経験的方法の問題性 24-29 (199, 16-201, 22)
 - 3.2. 計画された企ての方法的実質的路線 29-37 (201, 22-205, 2)
 - 3.2.1. 企ての方法的発端：観察における唯一の適切な出発点としての宗教の顕現の仕方の観察 29-31 (201, 22-202, 10)
 - 3.2.2. 同時代の宗教理論の枠組みにおけるこの企ての位置づけについて：道徳からの宗教の独立 31-37 (202, 10-204, 34)
 - 3.2.3. この企ての主要目的：人間の内面における宗教の明白なる自律性の証明 37 (204, 34-205, 2)

第1 主要部：第2 講演「宗教の本質について」;38-133 (206, 1-247, 11)

主題：宗教の実質概念の思弁的に取り扱われた内容規定

0. 序：解釈学的困難 38-50 (206, 3-211, 26)

0.1. 目指す宗教の直接的本質直観は、理想的な認識技術の点からは、宗教をそれ自体から理解することを要求する。38-39 (206, 3-207, 4)

0.2. しかしこのような企ては、宗教が現実には、決して純粹に、混じりけ無しに現れないことにより、方法論的困難さと内容的な問題性に直面する。40-41 (207, 4-35)

0.3. 境界を設けることによる本質規定。それは本質と現象の相違の中に横たわる解釈学的二律背反によっている。すなわち、宗教は本質においては形而上学や道徳とは異なったものである。41-50 (207, 36-211, 26)

0.3.1. この区別は、(同一の)対象に存するものではなく、(異なった)態度に存するものである。41-43 (207, 36-208, 28)

0.3.2. この否定的な本質規定が引き起こす二つの抗議についての議論、それらは決して純粹ではなく、絶えず限定された宗教現象に関係している。43-50 (208, 28-211, 26)

0.3.2.1. 宗教は、形而上学や道徳の質草の集合体ではない。カテゴリーの観点からみても両者とは異なるものである。43-47 (208, 28-210, 22)

0.3.2.2. 宗教的資料に限定された宗教現象は、その作用において倒錯した、教化的意図に由来する。47-50 (210, 22-211, 26)

1. 本論：宗教の肯定的本質規定 50-115 (211, 27-239, 28)

1.1. 関係的議論の進展：形而上学や道徳に対する宗教の関係 50-55 (211, 27-213, 33)

1.1.0. 綱領に則した構成的な宗教の本質規定、すなわち直観と感情としての宗教 50-51 (211, 27-212, 1)

1.1.1. 形而上学と道徳に対する対立関係 51-52 (212, 2-15)

1.1.1.1. 形而上学に対する対立関係についての構成的規定 51 (212, 2)

-10)

- 1.1.1.2. 道徳に対する対立関係についての構成的規定 51-52 (212, 10-15)
- 1.1.2. 形而上学と道徳に対する補足的関係 52-55 (212, 15-213, 33)
 - 1.1.2.1. 形而上学と道徳に対する補足的関係についての構成的規定 52-53 (212, 15-32)
 - 1.1.2.2. 道徳に対する補足的関係についての構成的規定 53 (212, 32-213, 9)
 - 1.1.2.3. 形而上学に対する補足的関係についての構成的規定 53-55 (213, 9-33)
- 1.2. 自発的議論の進展：直接的本質直観 55-71 (213, 34-220, 29)
 - 1.2.1. 宇宙の直観 55-66 (213, 34-218, 20)
 - 1.2.1.1. 直観一般の第1定義：あらゆる直観一般に共通する能動的かつ受動的、相関的で、認識的ではない性格 55-56 (213, 34-214, 9)
 - 1.2.1.2. この直観一般についての最初の本質的特徴の宗教的宇宙直観に対する関係：真の宗教的直観と、この直観の宗教と神話への概念的演繹的適用としての単なる神話との間の対立関係 56-58 (214, 9-215, 3) (証明過程の歴史的経験的例証 214, 18-36)
 - 1.2.1.3. 直観一般の第2定義：すべての直観の個的非体系的性格 58 (215, 3-7)
 - 1.2.1.4. 宗教的直観に対するこの第2定義の関係：宗教的直観の根拠、内容、妥当性は、その個的特殊性にある。58-61 (215, 7-216, 17)
 - 1.2.1.5. 直観一般の第3定義：あらゆる直観の形式的内容的無制約性 (Unbeschränktheit) 61-62 (216, 17-27)
 - 1.2.1.6. 宗教的直観に対するこの第3定義の関係：宗教的直観の統合的普遍的性格 62-66 (216, 27-218, 20)
 - 1.2.1.6.0. 序：宗教的直観の無限性という形式原理が、その内容的

無決定性 (Undeterminiertheit) の根拠である。62 (216, 27-37)

1.2.1.6.1. この個的 (individuelle) 宗教的直観は、他の個人的に (persoenlich) 涵養された宗教的諸直観に干渉して対立するものではない。62-64 (216, 37-217, 19)

1.2.1.6.2. この個的宗教的直観は、他の歴史的に涵養された宗教的諸直観と教義学的に対立するものではない。64 (217, 20-35)

1.2.1.6.3. まとめ：この普遍的内容的な調和の根拠は、可能な直観の媒介変数 (パラメータ) が持つ、形式規定的無制約性にある。64-66 (217, 35-218, 20)

1.2.2. 感情 66-71 (218, 20-220, 29)

1.2.2.1. 感情の定義：絶えず一つの直観と結びつき、同時に能動的でもあり受動的でもある感情の性格 66-67 (218, 20-35)

1.2.2.2. 宗教的根本状態に対するこの本質的特徴の関係：内容を与える直観と、形式を与える感情が、個々の宗教の確固とした構造図式 (Konstitutionsschema) を形作る。67-68 (218, 35-219, 15)

1.2.2.3. 直接的に行為によって動機づけられた感情とは一線を画すところの、間接的に活動し、形式を付与する宗教的感情の性格の素描 68-78 (219, 15-220, 29)

1.3. 蝶番的部分：直観と感情の統一の根拠としての宗教的原印象 Ureindruck 71-78 (220, 29-223, 19)

1.3.1. 直観と感情の事実に統一と、解釈学的問題として、技術的には両者を個々別々に観察しなければならないことの間にある対立 71-73 (220, 29-221, 19)

1.3.2. 直観と感情の本質における根源的一致の発現：宗教的原印象としての「最初の秘密に満ちた瞬間」 73-78 (221, 20-223, 19)

1.3.2.1. 原印象の出来事を描写する試み 73-75 (221, 20-222, 8)

- 1.3.2.2. この現印象は、個々人それぞれの根源的開示の出来事と印象的に結合している。75-78 (222, 8-223, 19)
- 1.4. 関連する議論の進展：個々に現れる宗教的直観と感情に対し宗教の本質叙述を内容的に満たされた仕方で適用すること 78-115 (223, 20-239, 28)
- 1.4.1. 直観と感情の統一の客観的側面：3つの同心円上に描かれる真の宗教的直観の発火誘因のスケッチ 78-108 (223, 20-236, 21)
- 1.4.1.1. 外的対象的自然の宗教的直観 78-87 (223, 20-227, 24)
- 1.4.1.1.1. 境界付けのための規定 78-82 (223, 20-225, 23)
- 1.4.1.1.1.1. 真の宗教的直観は可視的自然力からは得られない。78-81 (223, 20-225, 6)
- 1.4.1.1.1.2. 真の宗教的直観は自然物の可視的充満からも得られない 81-82 (225, 7-23)
- 1.4.1.1.2. 積極的規定：宗教的直観は、最善の場合でも、自然全体の法則的連関や、相互の調和の印象によって獲得される。82-87 (225, 23-227, 24)
- 1.4.1.1.2.1. 目的論的秩序としての法則的連関：生成の法則 82-86 (225, 23-227, 1)
- 1.4.1.1.2.2. 存在論的秩序としての法則的連関：生成したものの存在 86-87 (227, 1-24)
- 1.4.1.2. 繋ぎのための間奏：外なる自然の直観と人間性の直観とは、間主観性に根ざす解釈学的必然性と共に、自己直観に包含される。87-89 (227, 25-228, 23)
- 1.4.1.3. 間主観的同一性の直観としての人間性の宗教的直観 89-104 (228, 24-234, 32)
- 1.4.1.3.1. 境界付けのための規定：人間性への関心は道徳的動機からの関心ではない 89-90 (228, 24-41)
- 1.4.1.3.2. 積極的規定：人間性の直観において、個々人の個性は、自らを決定的な自然連関の表現として発見する。90-104

(228, 41-234, 32)

1.4.1.3.2.1. 存在論的秩序としての決定的自然連関：人間性という理念における個性の存在 90-98 (228, 41-232, 5)

1.4.1.3.2.2. 補足的間奏, 1.4.1.3. で展開された議論を1.4.1.2. に結び付ける。：人間性的個性の宗教的直観は, 自らの真性性の証明を自己直観の中に見出す。98-99 (232, 5-28)

1.4.1.3.2.3. 目的論的秩序としての決定的自然連関：人間性の歴史における個性の姿 99-104 (232, 29-234, 32)

1.4.1.4. 有限者と無限者自体のより高次の合一という宗教的直観 104-108 (234, 33-236, 21)

1.4.1.4.1. それは一方で, 聴衆の心情においても宗教の目的を持った本質の予感として現れ, 他方 (あらゆる対象性からの最大限の離隔のゆえに) 積極的記述を避ける。104-106 (234, 33-235, 34)

1.4.1.4.2. この直観の可能的分類を, 道徳に対する相違において規定する。106-108 (235, 34-236, 21)

1.4.2. 直観と感情の統一の主観的側面：スケッチ風に素描された真の宗教的感情の自己関係性 108-115 (236, 22-239, 28)

1.4.2.1. 自己直観によって媒介された宗教的直観の表現としての伝統的宗教感情 108-111 (236, 22-237, 32)

1.4.2.2. 道徳に対する相違における宗教的感情の可能な分類規定 111-112 (237, 32-238, 14)

1.4.2.3. 形而上学, 道徳, 芸術との対照における宗教の本質規定のまとめ：宗教によって人間が刺激されるということは, 有限者へ向けられた認識的形成的人間の作用が, 無限的連関への気づきによって伴われることとして現れる。そこにおいて宗教は, 個性と普遍性との統一としての人間の本質を完成する。

2. 付論：本論において述べられた宗教の本質規定の結実を宗教的本質の伝統的教義に対する関係を手がかりに叙述する。115-123 (239, 29-242, 35)
 - 2.1. 宗教的なるものの所与の事実性との関係における教義学的認識の後発的反省的な性格 115-116 (239, 29-240, 7)
 - 2.2. 教義学的認識と一般的学問的認識原理との両立性 116-117 (240, 7-21)
 - 2.3. 選択された教義学的概念による教義学的認識のこの一般的反省的な性格の例証 117-119 (240, 21-241, 15)
 - 2.4. まとめ：媒介的反省的なものに対する、真の宗教的原印象の優位 119-122 (241, 15-242, 23)
 - 2.5. アピール的結び：宗教の普遍的な性格と聴衆の教養の普遍的な性格の両立性 122-123 (242, 23-35)

3. 補遺（起こりうる反対意見を防ぐために）：神や不死についての伝統的概念と、本論で述べられた宗教の本質規定とは一致する。123-133 (242, 36-247, 11)
 - 3.1. 導入的に、これまで展開された次の命題：「神」と「不死」とは、個々の独立した宗教的直観のあり方の概念的表現である。123-124 (242, 36-243, 21)
 - 3.2. この命題をめぐる議論 124-133 (243, 22-247, 4)
 - 3.2.1. 神概念について 124-130 (243, 22-246, 8)
 - 3.2.1.1. 境界付けのための規定：既に述べられた宗教的直観の構造からしても、神概念は擬人化された人類の守護神という構成概念ではありえない。124-126 (243, 22-244, 11)
 - 3.2.1.2. 積極的な規定：素描された構造のあり方が許すのは、絶えず言われてきたように、自らを段階図式的に完成する宇宙直観という直観である。126-128 (244, 11-245, 16)
 - 3.2.1.3. この直観と伝統的神概念との結合は、想像力の合法的産物であり、宗教の本質を規定する独自の直観という価値はない。128-129 (245, 16-33)

- 3.2.1.4. 補遺：神概念的に理解可能な宇宙直観の内容と行為する神という思想の合一可能性 130 (245, 33-246, 8)
- 3.2.2. 不死概念について：これまで述べられた真の宗教的直観の源泉としては不死概念は無価値であること 130-133 (246, 9-247, 4)
- 3.3. 結び：「神」と「不死」という二つの宗教的直観のあり方と宗教を覚醒する原印象との関係について 133 (247, 4-11)

全編における間奏部（メタ論証的挿入）：間主観的宗教的コミュニケーションの内的必然性と外的形成の実現可能性（第3講演「宗教教育について」と第4講演「宗教における共同体あるいは教会と聖職について」）

A. 第3講演「宗教教育について」：134-173 (248, 1-265, 8)

主題：宗教的コミュニケーションの必然性についての規定，宗教の本質規定から生ずる限界内で

1. 主題規定 134-143 (248, 3-252, 8)

1.1. 境界付けによる主題規定：宗教的情緒を意図的に生産することの不可能性 134-142 (248, 3-251, 31)

1.1.1. 講演者は宗教を生産することを望まない。134-138 (248, 3-249, 36)

1.1.2. なぜなら宗教体験を間主観的手段によって生み出すことは、原理的に不可能だから 138-142 (249, 37-251, 31)

1.2. 積極的主題規定：人間の宗教的感受性は（宇宙の自己表現というすでに素描された様態に含まれる業として）間主観的宗教的コミュニケーションへと涵養されることの証明 142-144 (251, 32-252, 8)

2. 境界付けによる展開：宗教的素質との，その担い手を通しての，本質的に正当でない発展を阻止するところの交流の形式 144-162 (252, 9-260, 11)

2.1. 宗教的機能の外部：自らを宗教的感覚に対して表す質料が，形而上学的または道徳的に動機づけられた解体を経験することによって 144-156 (252, 9-257, 21)

2.2. 宗教的機能の内部：宗教的直観の誘因，自己直観は，超えられること

が無いということによって 156-162 (257, 21-260, 11)

3. 積極的展開：間主観的宗教的コミュニケーションにおいて、宗教的なものを受容する能力を涵養する必然性 162-173 (260, 12-265, 8)

3.1. 阻止しがたい宗教的感覚の形式，その集約性 *Intensitaet* によって 162-165 (260, 12-261, 22)

3.1.1. 宗教的感覚のさまざまな階調の命名 162-163 (260, 12-26)

3.1.2. 集約性のさまざまな形式は，宗教的感覚の根源的本質必然的非阻止性の育成のために，コミュニケーション的媒介を必要とする。163-165 (260, 26-261, 22)

3.2. 阻止しがたい宗教的感覚の形式，その広がり *Extensitaet* によって 165-173 (261, 22-265, 8)

3.2.1. 宗教的直観のさまざまな方向での展開，自己直観や世界観察において，最後にその両者の結合としての芸術鑑賞において 165-170 (261, 22-263, 15)

(付論：宗教的感覚の独自の方向としての芸術鑑賞は，さしあたり現象学的なものとして，まだ排除されない 166-170 [262, 2-263, 15])

3.2.2. 広がりさまざまな形式は，同様に，宗教的感覚の根源的本質必然的非決定性の育成のために，コミュニケーション的媒介を必要とする。170-173 (263, 16-265, 8)

B. 第4講演「宗教における共同体あるいは教会と聖職について」；174-234 (266, 1-292, 3)

主題：現実の宗教的コミュニケーションの外的必然的形態の規定

0. 方法的発端の規定 174-176 (266, 5-267, 15)

0.1. 境界付けによる発端規定：経験的に知覚可能な教会の事実的生は，考察の対象ではない 174-176 (266, 5-267, 12)

0.2. 積極的発端規定：むしろ宗教の本質規定に包含されているコミュニケーションの姿が規定されるべきである。176 (267, 12-15)

1. 宗教的コミュニケーションの現実性の姿の規定に関する人間学的宗教的

- 媒介変数（パラメータ）の収集 176-184（267, 16-270, 13）
- 1.1. 人間学的媒介変数 177-179（267, 16-268, 14）
 - 1.1.1. 人間学的必然性としての能動的媒介の必要性 177-178（267, 16-268, 3）
 - 1.1.2. 人間学的必然性としての受動的感受の必要性 178-179（268, 3-14）
 - 1.2. 宗教的媒介変数179-184（268, 14-270, 13）
 - 1.2.1. 宗教的コミュニケーションの対象は、そのコミュニケーションに同時的に存在する必然性と困難性のゆえに、独自の組織形態を要求する。179-181（268, 14-269, 13）
 - 1.2.2. その自律的な根拠と姿において、宗教的コミュニケーションの組織形態は、宗教的原印象の本質自体と関係する。181-184（269, 13-270, 13）
2. 宗教的コミュニケーションの理想的目的姿の記述、現実の教會的生に対してなされる伝統的非難の対照的拒否において獲得された 184-190（270, 13-273, 10）
- 2.1. 公に承認された宗教的才能の度合いについての伝来の階層的段階図式は、宗教的形式の多面的な全体像になる。184-185（270, 13-24）
 - 2.2. さまざまな宗教的直観内容の間での伝来の抗争図式は、宗教的内容の多面的な全体像になる。185-187（270, 24-271, 36）
 - 2.3. （上で述べられた対立形式から導き出される）伝達と受容の間における伝来のコミュニケーション技術の対立は、コミュニケーションの平均化された全体像へと相対化される。
3. 草案の仕上げ：実際の教會的枠組みの中で、宗教的コミュニケーションの理想像を実現する可能性 190-234（273, 11-292, 3）
- 3.1. 基本方針的な命題：宗教的コミュニケーションのこの理想像は、真の勝利した教會の宗教的コミュニケーションにおいて、すでに現実の姿を持っている。190-192（273, 11-44）
 - 3.2. 挿入部：真の教會から逸れた外的教會の失格した姿についての対照的解釈 192-232（274, 1-290, 38）

- 3.2.1. 差異の原因は宗教自体にあるのではなく、教会の構成員の宗教に対する態度にある。彼らは宗教を持っておらず、さしあたり間違っただけの求め方をしている。 192-199 (274, 1-276, 36)
- 3.2.2. 外的教会の存在を正当化する課題は、宗教を求め所有している人々に結びついている機能にある。199-203 (276, 37-278, 17)
- 3.2.3. この結合機能は、目下のところ外的教会を知覚することができない。すなわち、宗教の本質に存する内的根拠からではなく、教会生活への国家による干渉という外的根拠から 203-232 (278, 18-290, 38)
 - 3.2.3.1. 個々における好ましくない干渉の記述 (分析的部分) 203-218 (278, 18-284, 21)
 - 3.2.3.2. 外的教会の理に反した醜い姿を棄却するために、宗教の本質規定から考え付く提案 (構成的部分) 218-226 (284, 22-288, 9)
 - 3.2.3.3. 外的教会の理に反した特徴の克服からその棄却までの、宗教の本質規定から考え付く戦略 (paraenetischer Teil) 226-232 (288, 10-290, 38)
- 3.3. 再び真の教会について一瞥する：真の教会に支配的な宗教的コミュニケーションの姿は、宗教の本質から導き出されるもので、外的教会に対して規範的な特徴を持つ 232-234 (290, 39-292, 3)

第2 主要部：第5 講演「諸宗教について」;235-312 (293, 1-326, 9)

主題：統一的直観的に現れる宗教の本質が個々の諸宗教における姿で経験的に知覚される可能性を (第2 講演で展開された) 宗教の本質規定の内含として、また (第3, 4 講演で付論的に論じられた) 宗教的コミュニケーションの可能性の必然的条件として論ずる。

0. プロレゴメナ：理解の範疇の規定 235-286 (293, 3-314, 25)

0.1. 先行した講演から生ずる第5 講演の研究主題 235-238 (293, 3-294, 21)

0.1.1. (第3, 4 講演の結論及び第2 講演の基本命題とに結び付けるためのまとめ：) 宗教は自ら作用する。宗教的感受性が陥りやすい過

ちを克服するための助けは、コミュニケーションの課題と可能性の領域に属する 235-237 (293, 3-294, 13)

0.1.2. (第5講演の主題提示) 個々の宗教現象は、ただその根源的自己顕現からのみ理解可能というように規定された制限のもとで、第5講演は、特定の各個宗教それぞれにおける宗教の一般的な本質(第2講演で規定された)の直観的現象形態を理解するための本質内在的範疇を準備する。237-238 (294, 14-21)

0.2. 経験的所与の研究対象と、宗教の思弁的本質規定との一致の根拠付け、これは先行する講演から結果するものである。238-242 (294, 22-296, 23)

0.2.0. 命題的にまとめられた形式の対比：教会の多数性は、宗教の本質と矛盾するものと見なされたかもしれないが、各個宗教の多数性は、宗教の本質に存する事柄に即した必要と認められねばならない。238-240 (294, 22-295, 16)

0.2.1. なぜなら、宗教の無限的本質はただ有限性の条件と結びついた形式においてのみ現れ得るゆえに、この本質は、段階図式的に互いに秩序付け、個的に現象し、共同体的に組織される形式において、自らを個別化するからである。240-241 (295, 17-33)

0.2.2. 経験的研究と思弁的本質直観との補完的關係は、そこにおいて宗教の無限的本質と、有限的現象形式との補完的關係が基礎付けられるのだが、研究の方法と目的を規定する。241-242 (295, 33-296, 23)

0.2.2.1. 方法：宗教の個々の現象形式は、個性化の原理の現象形式と見なし得るかという問いの吟味 241-242 (295, 33-296, 13)

0.2.2.2. 目的：宗教の本質の完全な理解 242 (296, 13-23)

0.3. 先行する講演から結果する研究対象 242-279 (296, 24-311, 23)

0.3.1. 積極的規定：実定的諸宗教 242-272 (296, 24-308, 32)

0.3.1.0. 導入的關係規定：宗教の本質的内容は、実定宗教においてのみ現われ、自然宗教においてではない。242-244 (296, 24-297, 14) (この節は0.3.2.を先取りして示している)

0.3.1.1. 実定的諸宗教の際立った個性を引き合いに出すというこの研

究対象の選択に対して、予想される抗議を前もって例示する。
244-246 (297, 15-38)

0.3.1.2. 反論：宗教のうわべでない根源的本質は、実定的諸宗教の個性の中に見出されるべきであるという指示。(上の抗議に対するこの基本方針的応答は、同時に、反論を初めて内容的に展開する以下の二つの挿入部—そこにおいて研究対象としての実定的諸宗教の有益性が間接的に立証されるのだが—の命題的導入的発端としても機能している) 246-247 (297, 39-298, 26)

0.3a. (第1挿入部：) 先行する講演から結果する研究方法(この部分は、0.4.の内容を先取りして示している)：聴衆は、実定的諸宗教を独立した理解努力によって、それらの内的本質自体から理解しなければならない。—ここではただ理解の範疇だけが準備されるのであり、決して完全な見解が示されるわけではない。247-249 (298, 26-299, 5)

0.3b. (第2挿入部：) 先行する講演から結果する研究前提 249-272 (299, 6-308, 32)

0.3b.0. 導入命題 249-250 (299, 6-25)

0.3b.0.1. 宗教の本質に対する共同体的各個宗教の関係は、宗教の本質に対する個々の個人的宗教の関係と構造的に同一である。
249-250 (299, 6-21)

0.3b.0.2. それゆえ、求められているさまざまな個人的宗教的直観を共同体的な各個宗教にまとめる可能性は、内容的観点ではなく、単に形式的観点にのみ存する。

0.3b.1. 境界付けによる規定 250-259 (299, 26-303, 22)

0.3b.1.1. 各個宗教を構成する把握可能性原理は、宗教的素材の内容的数量化可能性の中にはあり得ない。250-255 (299, 26-301, 32)

0.3b.1.1.1. 思弁的に議論された証明過程 250-253 (299, 26-301, 7)

- 0.3b.1.1.2. 經驗的に裏付けられた議論の過程 253-255 (301, 7-32)
- 0.3b.1.2. 把握可能性原理は、宇宙直観の3段階図式によっては形成され得ない。(ad 244, 11-245, 16) 255-256 (301, 33-302, 13)
- 0.3b.1.3. 把握可能性原理は、神表象の2形式図式によっては形成され得ない。(ad 245, 16-33) 256-259 (302, 13-303, 22)
- 0.3b.2. 積極的規定：各個人の個的宗教と宗教の一般的本質との間の媒介点へ個々の直観を高めることの中に、個人の宗教の構成原理と構造的に類比的な、共同体的宗教の形式的構成原理が存する。259-272 (303, 23-308, 32)
 - 0.3b.2.1. (先取りされたまとめ：)一つの直観を中心的直観に高めることの中に、共同体的宗教の構成のあり方がある。259-261 (303, 23-304, 9)
 - 0.3b.2.2. したがって各個人の個的宗教を共同体的宗教に結合する可能性は、その構成のあり方の構造的類比において与えられる。261-264 (304, 9-305, 19)
 - 0.3b.2.2.1. そのような結合の必然性261 (304, 9-19)
 - 0.3b.2.2.2. あらゆる個的結合の形式的一致(それは個的宗教的原印象の規範的内容に存する)261-264 (304, 19-305, 19)
 - 0.3b.2.3. 各個人の個的宗教の生活空間、展開空間としての共同体的宗教 264-272 (305, 20-308, 32)
 - 0.3b.2.3.1. 命題的にまとめられた序論 264 (305, 20-26)
 - 0.3b.2.3.2. 思弁的主要部と繰返し：各個人の個的宗教の構成のあり方についての第2の記述、それは宗教的原印象の刻印的受容を通してなされる。264-268 (305, 26-307, 16)
 - 0.3b.2.3.3. 經驗的鍛練：直観的に与えられた宗教的原印象が、宗教的人間の宗教生活のすべての形式に刻印する作用を経験的に知覚可能なこと 268-271 (307, 16-308, 14)

- 0.3b.2.3.4. 締めくくり的な応用, 述べられた構造類比を上位の議論連関へ応用すること: 構造類比の表示は実定宗教の領域においてのみ可能 271-272 (308, 14-32)
- 0.3.2. 境界付けによる規定: これに対し自然宗教が研究対象として不適格である理由は, その個性の無い一般性にある。272-279 (308, 33-311, 23)
- 0.4. 結論: 先行する講演から生ずる研究の解釈学的規則は, 同時に, 宗教個々の姿の適切な知覚すべての解釈学的規則でもある。279-286 (311, 24-314, 25)
- 0.4.0. 資料の個々の観察すべてに対する規則のまとめへの移行 279-280 (311, 24-312, 6)
- 0.4.1. 第1規則: 無限者を観察する対象領域は, 経験的有限的に現象するもののみを包括できる。280-281 (312, 6-20)
- 0.4.2. 第2規則: 対象を扱う仕方は, 具体的な姿を刻印する根本直観を求めることの中にのみある。281-282 (312, 21-36)
- 0.4.3. 第3規則: その際次のことは考慮されねばならない。すなわち, 共同体的宗教の中心的直観は, 各個人の個的宗教の中心的直観と必ずしも同一ではない。282-284 (312, 36-313, 34)
- 0.4.4. 第4規則: 絶えず結びつく宗教現象のあり方は, 全体を通して見抜かれねばならない 284-285 (313, 34-314, 7)
- 0.4.5. 第5の最も重要な規則: 宗教は, 宗教を通して初めて可能になり, それゆえ宗教に後続するところの宗教者による反省とは, 区別されねばならない。285 (314, 7-20)
- 0.4.6. 結び: 宗教をそれ自体から理解するという要求に対する理想的な, 非難の余地の無い前提があるとすれば, それは自ら一つの宗教を持つことである。285-286 (314, 21-26)
1. 理解の範疇の資料的例証 286-312 (314, 25-326, 9)
- 1.0. キリスト教に努めて限定するということの, 講演者の個人的関与による根拠付け。286 (314, 25-35)

- 1.1. 旧約聖書のユダヤ教という個的宗教 286-291 (314, 36-316, 25)
 - 1.1.0. 序論：旧約聖書のユダヤ的宗教の中心直観は、色褪せたゆえに、それは否定的事例に相応しい。286-287 (314, 36-315, 10)
 - 1.1.1. 旧約聖書のユダヤ的宗教の中心直観：報復としての宇宙の理念 287-289 (315, 10-35)
 - 1.1.2. 預言におけるこの中心直観の宗教現象学的現われ方 289-290 (315, 35-316, 9)
 - 1.1.3. この中心直観は現実の複雑さの要求に対し考慮されないので、それは、形而上学的道徳的舞台道具の背後に退く 290-291 (316, 9-25)
- 1.2. キリスト教という個的宗教 291-310 (316, 26-325, 19)
 - 1.2.1. キリスト教的宗教の一般的中心直観：有限者の救済要求と無限者の救済力との調和 291-293 (316, 26-317, 33)
 - 1.2.2. この中心直観の宗教現象学的現われ方 293-299 (317, 33-320, 9)
 - 1.2.2.1. 宗教の自己直観において 293 (317, 33-38)
 - 1.2.2.2. 集中的に論争的な性格において 294-298 (317, 38-319, 28)
 - 1.2.2.3. 広範な弁証的性格において 298-299 (319, 28-320, 9)
 - 1.2.3. この一般的中心直観に伴う一般的根本感情：絶えず感じられる欠乏についての聖なる悲しみ 299 (320, 10-22)
 - 1.2.4. ナザレのイエスの個人的宗教と、彼によって主導された共同体的宗教の関係 299-305 (320, 22-323, 9)
 - 1.2.4.1. 個人的中心的宗教直観に伴う根本感情：イエスに優勢な感情としての聖なる悲しみ 299-300 (320, 22-31)
 - 1.2.4.2. 補遺的な間奏，目下の例証を先に与えられた解釈学的規則 (279-280 [311, 24-312, 6]) に関係させる 300-301 (320, 32-321, 4)
 - 1.2.4.3. イエスの個人的宗教を原印象的に刻印する宇宙の直観，その抽象化された姿において，その直観はイエスによって主導されたキリスト教という共同体的宗教の中心直観へと昇進する。301 (321, 4-17)

- 1.2.4.4. イエスの宗教的原印象 301-305 (321, 17-323, 9)
 - 1.2.4.4.1. 個人的宗教を起爆する原印象の誘因と時点とは、イエスの場合特定不可能である。301-302 (321, 17-24)
 - 1.2.4.4.2. イエスの個人的宗教の直観的中心の対象としての宗教的原印象の内容：その独自の仲保者としての働きに対するイエスの信仰 302-303 (321, 24-322, 4)
 - 1.2.4.4.3. そのように規定可能な原印象的直観についての言説：イエスのメシア的自己評価 303 (322, 4-16)
 - 1.2.4.4.4. 個人的宗教を特徴づけるイエスの直観的で具体的な原印象とキリスト教という共同体的宗教の中心直観との間の範疇的差異 303-305 (322, 16-323, 9)
- 1.2.5. キリスト教という共同体的宗教の中心直観が持つ改革や進展に対する原理的な開放性、それはキリスト教の中心直観の構造契機としての個人的宗教の原印象的直観による。305-310 (323, 9-325, 19)
 - 1.2.5.1. 中心直観の開放性の例証 305-307 (323, 9-35)
 - 1.2.5.2. キリスト教の中心直観の開放的性格に存する自己自身を保持する機能 307-309 (323, 36-325, 2)
 - 1.2.5.3. キリスト教の中心直観の開放的性格に存するメタ宗教的特徴 309-310 (325, 3-19)
- 1.3. 結び 310-312 (325,, 20-326, 9)

注

- (1) Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst: *Ueber die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Veraechtern*, Berlin 1799.
- (2) この分類は主に、Albrecht, Christian: *Schleiermachers Theorie der Froemmigkeit*, Walter de Gruyter 1994, (以下 Albrecht) S.107 に従った。
- (3) Albrecht, S. 336-350.
- (4) Schleiermacher, F.: *Ueber die Religion. Reden an die Gebildeten unter*

ihren Veraechtern. Zum Hundertjahr-Gedaechtnis ihres ersten Erscheinens in ihrer urspruenglichen Gestalt neu herausgegeben von R. Otto, Goettingen 1899.

- (5) Hertel, Friedrich: *Das theologische Denken Schleiermachers untersucht an der ersten Auflage seiner Reden "Ueber die Religion"*, Zuerich-Stuttgart 1965, S. 281-286. (以下 *Denken*)
- (6) Dilthey, Wilhelm: *Leben Schleiermachers*. Bd. 1: Berlin 1870, S. 396-426. (以下 *LS I*)
- (7) Fuchs, Emil: *Schleiermachers Religionsbegriff und religioese Stellung zur Zeit der ersten Ausgabe der Reden (1799- 1806)*, Giessen 1901, S. 26-36. (以下 *Religionsbegriff*)
- (8) Piper, Otto: *Das religioese Erlebnis. Eine kritische Analyse der Schleiermacherschen Reden ueber die Religion*, Goettingen 1920, S. 20-42.
- (9) Fuchs, Emil: *Wandlungen in Schleiermachers Denken zwischen der ersten und zweiten Ausgabe der Reden*, in: ThStKr 76, Bd. 1, Heft 1 (Hamburg 1903). (以下 *Wandlungen*); Graf, Friedrich Wilhelm: *Urspruengliches Gefuehl unmittelbarer Koinzidenz des Differenten. Zur Modifikation des Religionsbegriffes in den verschiedenen Auflagen von Schleiermachers "Reden ueber die Religion"*, in: ZThK 75, (Tuebingen 1978), S. 147-186. (以下 *Koinzidenz*)
- (10) Huber, Eugen: *Die Entwicklung des Religionsbegriffs bei Schleiermacher*, Leipzig 1901. (以下 *Entwicklung*); Lasch, Gustav: *Schleiermachers Religionsbegriff in seiner Entwicklung von der ersten Auflage der Reden bis zur zweiten Auflage der Glaubenslehre*, Erlangen 1900. (以下 *Religionsbegriff*); Buchholz, Paul: *Das religioese Bewusstsein nach Schleiermacher*, Praust 1907.
- (11) Fuchs: *Wandlungen* S. 77.
- (12) Wehrung, Georg: *Religion als Bewusstsein schlechthinniger Abhaen-*

- gigkeit, in: Luther, Kant, Schleiermacher in ihrer Bedeutung fuer den Protestantismus. FS G. Wobbermin zum 70. Geburtstag, hg. v. F.-W. Schmidt, W. Meyer, R. Winkler, Berlin 1939, S. 519. (以下 Religion);*
- Hirsch, Emanuel: *Geschichte der neuern evangelischen Theologie im Zusammenhang mit den allgemeinen Bewegungen des europaeischen Denkens*, 3. Aufl. Guetersloh 1964, Bd., S. 559. (以下 Geschichte);
- Otto, Rudolf: *West-oestliche Mystik. Vergleich und Unterscheidung zur Wesensdeutung*, Gotha 1926, S. 339. (以下 West-oestliche Mystik)
- (13) Schultz, Werner: *Schleiermachers Theorie des Gefuehls und ihre theologische Bedeutung*, in: ZThK 53 (Tuebingen 1956), S. 75-84.
- (14) Graf: *Koinzidenz*, S. 158-177.
- (15) Albrecht: S. 109-111.
- (16) Albrecht: S. 124, Anm. 104 を参照。
- (17) Wendland, Johannes: *Die religioese Entwicklung Schleiermachers*, Tuebingen 1915, S. 50. (以下 Entwicklung)
- (18) Otto: *West-oestliche Mystik*, S. 336-341.
- (19) Bender, Wilhelm: *Schleiermachers Theologie mit ihren philosophischen Grundlagen dargestellt. Tl. 1: Die philosophischen Grundlagen der Theologie Schleiermachers*, Noerdlingen 1876, S. 171-173.
- (20) Wehrung: *Religion*, S. 519.
- (21) Haym, Rudolf: *Die romantische Schule. Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes*. Berlin 1870, S. 426, 23-28
- (22) Lipsius, Richard Adelbert: *Schleiermachers Reden ueber die Religion*, in: JPTh 1, Braunschweig 1875, S. 173. (以下 Reden)
- (23) Gottschick, Johannes: *Rez. v. Ritschl, Otto: Schleiermachers Stellung zum Christentum in seinen "Reden ueber die Religion"*, Gotha 1888, in: ThLZ 1889, S. 530-533; Graf: *Koinzidenz*, S. 169.
- (24) Lasch: *Religionsbegriff*, S. 47, 53; Huber: *Entwicklung*, S. 57f; Fuchs: *Wandlungen*, S. 84, 92; Sueskind, Hermann: *Der Einfluss Schellings*

- auf die Entwicklung von Schleiermachers System*, Tuebingen 1909, S. 108. (以下 *Einfluss*)
- (25) Hirsch : *Geschichte IV*, S. 559-562.
- (26) Graf : *Koinzidenz*, S. 168, 177.
- (27) Lipsius : *Reden*, S. 173 ; Huber : *Entwicklung*, S. 46, 66 - 68 ; Fuchs : *Religionsbegriff*, S. 45 - 51 ; Seifert, Paul : *Die Theologie des jungen Schleiermacher*, Guetersloh 1960, S. 80-82. (以下 *Theologie*)
- (28) Lipsius : *Reden*, S. 301.
- (29) Ritschl, Otto : *Schleiermachers Stellung zum Christentum in seinen "Reden ueber die Religion"*, Gotha 1888, S. 46. (以下 *Stellung*)
- (30) Sueskind : *Einfluss*, S. 20-27.
- (31) Ritschl, Albrecht : *Schleiermachers Reden ueber die Religion und ihre Nachwirkungen auf die evangelische Kirche Deutschlands*, Bonn 1874, S. 31-39. (以下 *Reden*)
- (32) Huber : *Entwicklung*, S. 56.
- (33) Seifert : *Theologie*, S. 77-80.
- (34) Hertel : *Denken*, S. 99-105.
- (35) Hirsch : *Geschichte IV*, S. 503, 27-31.
- (36) Beisser, Friedrich : *Schleiermachers Lehre von Gott dargestellt nach seinen Reden und seiner Glaubenslehre*, Goettingen 1970, S. 32-43. (以下 *Schleiermachers Lehre*)
- (37) 例えは, A. Ritschl : *Reden*, S. 4 ; Wehrung, Georg : *Der geschichtsphilosophische Standpunkt Schleiermachers zur Zeit seiner Freundschaft mit den Romantikern*, Strassburg 1907, S. 103 ; Wendland : *Entwicklung*, S. 146 - 156 ; Seifert : *Theologie*, S. 169-187.
- (38) Wendland : *Entwicklung*, S. 149, 12-15.
- (39) Seifert : *Theologie*, S. 174, 34-35 ; Beisser : *Schleiermachers Lehre*, S. 13.
- (40) Seifert : *Theologie*, S. 181-187 ; Beisser : *Schleiermachers Lehre*, S.

47-52.

- (41) Flueckiger, Felix: *Philosophie und Theologie bei Schleiermacher*, Zollikon – Zuerich 1947, S.49-63.
- (42) Forsthoff, Heinrich: *Schleiermachers Religionstheorie und die Motive seiner Grundanschauung*, Rostock 1910, S. 93-100.
- (43) Seifert: *Theologie*, S. 84, 8-11.
- (44) A. Ritschl: *Reden*, S. 26-29, 37; Kirn, Otto: Art.:“Schleiermacher”, in RE (3. Aufl.), S. 595, 27-29; Lange, Dietz: *Historischer Jesus oder mythischer Christus. Untersuchungen zu dem Gegensatz zwischen F. Schleiermacher und D. F. Strauss*, Guetersloh 1975, S. 23.
- (45) Dilthey: *LS I*, S. 320-322; Lipsius: *Reden*, S. 165; O. Ritschl: *Stellung*, S. 51; Mechau, Martin: *Schleiermachers Auffassung vom Wesen der Religion in seinen “Reden ueber die Religion”*, Halle/S. 1899, S. 30-35; Otto: *West-oestliche Mystik*, S. 324-341; Piper, Otto: *Das religioese Erlebnis. Eine kritische Analyse der Schleiermacherschen Reden ueber die Religion*, Goettingen 1920, S. 91. (以下 Erlebnis)
- (46) Piper: *Erlebnis*, S. 9. 15.
- (47) Timm, Hermann: *Die heilige Revolution: Das religioese Totalitaetskonzept der Fruehromantik; Schleiermacher-Novalis-Schlegel*, Frankfurt/M. 1978, S.58.
- (48) Birkner, Hans-Joachim: *Theologie und Philosophie. Einfuehrung in Probleme der Schleiermacher-Interpretation*, Muenchen 1974, S.24-25.
- (49) Jensen, Pete: *Schleiermachers Auffassung vom Wesen der Religion und ihr Wert gegenueber dem modernen, besonders dem naturwissenschaftlich-geschichtlichen Denken*, Husum 1905, S.64-67.
- (50) Schneider, Martha: *Religionspsychologie Schleiermachers zur Zeit der ersten Auflage der Reden. Ein Beitrag zur Frage der emotionellen*

Leistungsfähigkeit pantheistischer Vorstellungen, Bonn 1918.

- (51) Ebeling, Gerhard: *Froemmigkei und Bildung*, in: FS Martin Doerne z. 70. Geburtstag, hg. v. D. Roessler, G. Voigt und F. Winter, Goettingen 1970, S. 69 - 100; Riemer, Matthias: *Bildung und Christentum. Der Bildungsgedanke Schleiermachers*, Goettingen 1989, S. 71-138; Wintsch, Hans Ulrich: *Religiositaet und Bildung. Der anthropologische und bildungsphilosophische Ansatz in Schleiermachers "Reden ueber die Religion"*, Zuerich 1967; Foreman, Terry Hancock: *Religion as the heart of humanistic culture; Schleiermacher as exponent of "Bildung" in the "Speeches on Religion" of 1799*, New Haven (Yale) 1975.
- (52) Neubauer, Ernst: *Die Begriffe der Individualitaet und Gemeinschaft im denken des jungen Schleiermacher*, in: ThStKr 95, S.1 - 77.
- (53) Scholtz, Gunter: *Die Philosophie Schleiermachers*, Darmstadt 1984, S. 80 - 82.